

むかし、むか～しのお話。

沖縄の那覇にある奥武山（おうのやま）が、漫湖（まんこ）の中にかぶ島だった時代の話じゃ。

漫湖（まんこ）は、今よりもずーっと大きな湖で、たくさんの猟師たちが魚を獲って暮らしておったと。

猟師たちは、海からのぼってくる魚や川を下ってくる魚を獲って、毎日、貧しいけれど一生懸命暮らしていたんだと。

そんなある年のことじゃった。

村一番の早起きの若者が、漫湖（まんこ）の沖の海から、大きな大きな、とてつもなく大きな黒いものが、ぐんぐん向かってくるのを見つけた。朝日を浴びながら、波しぶきとともに突き進んでくる黒いものに、若者の目は、釘付けになった。

「なんじゃ、ありゃあ？」

若者がじっと見つめている間に、そいつはすごいスピードで岸边に近づいてきた。そして、ドブンと急に水面から姿を消したので、若者が確かめるために岸边に近づいたところで、ぐわあーっと水面から大きな口を開けて飛び出してきた。

「うわああああっ。か、怪物だああああっ」

それは、家よりも大きくて、開いた真っ赤な口の周りには、黄色い鋭い牙がびっしり生えた、世にも恐ろしい怪物だった。

クジラなんかではなかった。

若者は、沖へ漁に出た時、潮を噴き上げるクジラを見たことがあったけど、その怪物は、クジラよりも大きかったし、何よりも凶暴だったから、そのランランと輝く目だけでも恐ろしくて腰を抜かしかけた。

若者は、かろうじて怪物の口を逃れると、村に向かって一目散に駆け出した。

「たっ、たいへんだあーっ。たっ、助けてくれ〜っ」

悲鳴をあげながら近くの家へと飛び込んで、怪物のことを村中に知らせた。そして、村中が大騒ぎとなった。

「昨日は、隣の村へ行こうとした金城さん家の娘っ子が、橋の近くで怪物に襲われて、もう少しで食われるところだったそうさ」

「いつも湖に潜ってるから、どこから現れるかわからん。おかげで漁にも出られん。どうしたらいいもんかのー」

怪物は、沖の海から追い立ててきた魚を湖の中に追い込んで一口に丸呑みすることに味をしめ、ずっと居座るようになっていた。しかも、湖の近くを歩く人でさえ、狙って飛び掛ってくるほど凶暴で、今では湖に近づくことさえ危険になっていた。

そんなことが続いたので、村中のみんなが集まって相談したが、なかなかいい考えが出

てこない。その時だ。一人の男が立ち上がって、みなの前に出た。

「わしが、退治してやろう」

その男は、村一番の大男で力自慢の三太だった。みな一瞬期待のこもった目で、男を見つめたが、男が三太だとわかると、ため息をつきながら、引き止めにかかる。

「三太！　いくらお前でも、あの怪物にやあかなうもんじゃねえ。やめとけ」

「そうだよ。力自慢もたいがいにしとけて」

「怪物に食われちまうぞ」

「この前、王様の家来のサムライが怪物に襲われてヤリで突いたけど、ヤリの方が折れちまったのを見た。おサムライさんでも、歯がたたないかもしんねえ怪物だぞ。少しくらい力が強いだけじゃあ、やっつけるのは無理だよ」

村のみなは、三太を引き止める。

村のみなは、三太のことをよく知っていた。三太は力持ちだが、少しのんびり屋で悪い奴によくだまされる。よく考えもせずに突っ走るところがあって、いろんな意味で損な性格だということ。

けれど、村のみなが引き止めようするほど、三太は意地になった。

「なあに。あんな怪物なんか、わし一人で十分だあ」

とうとう三太は、一人で怪物を退治することを引き受けてしまった。

「さて、どうやって怪物をやっつければいいかな？」

三太は、しばらく考えていたが、やがてポンと膝を叩くと、海に出て行った。

大飯食いの三太は、怪物にたくさんの魚を食わして、腹を大きくして動けないようにしてから、怪物を退治しようと考えたんじゃ。

三太は、毎日毎日、海からたくさんの魚を獲ってきて、怪物にたっぷり食わした。どんどん食わした。怪物も、どんどん魚を食った。どんどん魚を食ったけど……。

怪物は、動けなくなるどころか、どんどん大きくなっていった。

怪物は、漫湖の魚まで全部食べつくして、時には海岸まで上がってきて、人や家畜までも襲うようになってきた。

「ばかもの！　誰が怪物を大きくしろと言った？」

「よけい大変なことにしやがってー。どう責任を取るつもりだ？」

三太は、村中のみなに怒られた。湖の中をゆうゆうと怪物が泳ぎまわる。

「変だな～。うまくいくと思ったんだけど……」

そこで、三太は、再び考えた。そして、今度は大きな音で怪物を脅かして追い払おうと考えた。

たくさんの鍋や釜をくくりつけた縄を腰につけて、漫湖のまわりをドンガラ、ドンガラ大きな音を立てながら走り回った。

ドンガラ、ガシャガシャ、ガンガラガンガン。

ドンガラ、ガシャガシャ、ガンガラガンガン。

そのうるさいこと、うるさいこと。しかも、思いついてすぐ、真夜中から始めたものだから、音は寝静まった村中に轟き渡った。

雷のようなものすごい音に、村中の者がびっくりして飛び起きる。

「うるさい！」

「やめんかっ！」

三太は、村中のみなから怒られた。

……………これも失敗になった。

「ええい。こうなりゃ、やっぱりおれの力で怪物わ負かすしかねえ」

じれったくなった三太は、漫湖に怒鳴った。

「やい。怪物！ おれが相手になるから、かかってこい！」

すると怪物は、漫湖の水面を持ち上げるように姿を現し、大波となって、三太の方へと向かってきた。

そのあまりの大きさ、恐ろしさに三太は、腰を抜かしそうになったが、村中のみなが見ている前で、逃げ出すわけにもいかない。

もう、やけくそ気味になった三太は、かまわず怪物に飛び掛っていった。

一方の怪物は、これまで逃げてばかりいたはずの小さな人間が、向かってきたので、いくぶん慌てた。こいつは、ただの人間じゃねえ。気をつけないと一。

「うおおおおおおおおおおっ！」

三太が大声を張り上げて怪物に組み付く。

「んがあああああああっ！」

怪物も大きな牙をガチガチ鳴らしながら、三太に組み付く。

ガシーイイイイイイイン！

大きな口を開けて迫る怪物を、三太はかろうじて受け止めた。鋭い牙がびっしり生えた、大きな口が三太の目の前にある。人間など軽く一飲みしてしまえるほどの大きさだ。

「なんちゅうでかい口じゃ。なんてえ、バカ力じゃ。これはとても抑えきれん……………」

必死に怪物を押しとどめようとする三太を怪物はなんとか飲み込もうと、ジタバタ暴れまわる。でかい口が三太の頭の上でバクバクと開いたり閉じたりしている。

ギギギギギ……………

三太は、もう怪物の口の端をひつつかんで、飲み込まれんようにするのが、せいっぱいだ。怪物は、さらに三太を押しつぶそうと押し掛かかってくる。

ギリギリギリギリ……………

「あぶない。三太っ！」

それを見とった村中のみなも、気が気でない。けれど、怪物の恐ろしい目に射すくめられると、誰も手足がすくんで動けなくなる。ただ、三太と怪物の一騎打ちを見守るばかりだ。

「三太っ！ がんばれーっ！」

「負けるなーっ！ 三太っ！」

黙って見ておれなくなった村の者は、もう我を忘れて三太を応援しはじめた。

「三太っ！ がんばれーっ！」

「負けるなーっ！ 三太っ！」

「三太っ！ がんばれーっ！」

「負けるなーっ！ 三太っ！」

「三太っ！ がんばれーっ！」

「負けるなーっ！ 三太っ！」

そしたら……………

ヒューン。ドスウウウウン！

突然、空から大きな石が降ってきて、怪物に当たった。

「ぐわあああああああっ！」

怪物は、それでコロンと死んじまって、三太は助かった。

「やったなー。三太っ！」

「よくやった。三太！」

振ってきた石に助けられたとはいえ、村のみんなは、三太の勇気とがんばりを褒めるのを忘れなかった。

そして、あの石は、三太を助けるために神様が落としてくれたもんじゃと、うわさした。

今も、那覇市の小禄（おろく）にあるガーナー森という小さな山は、この時の怪物の成れの果てなんだと言われている。

みんなで行って見てごらん。

ガーナー森の怪物の話は、これでおしまい。